



TITLE:

自律性に着目した自己統制概念の 再考(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

後藤, 崇志

CITATION:

後藤, 崇志. 自律性に着目した自己統制概念の再考. 京都大学, 2015, 博士
(教育学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18729>

RIGHT:

許諾条件により本文は2016/03/23に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 教育学 ）	氏名	後藤 崇志
論文題目	自律性に着目した自己統制概念の再考		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、自己統制という概念とその心理プロセスについて、「自ら選択し、行動を制御している感覚」である自律性に着目して、実証的に解明した心理学研究である。論文は、7章、8つの研究（5調査、3実験）から構成されている。</p> <p>第1章「序論」では、導入として、1.1「自己統制と類似概念（自己制御・自己統制・認知制御）の定義」では、自己統制と関連概念である自己制御、認知制御の定義と、概念間の関係について述べ、1.2「自己統制における主体としての自己の見過ごし」では自己統制研究がとってきた視点について概観し、自己統制の主體的な側面が見過ごされてきたことを論じ、本論文における問題を提起している。</p> <p>第2章「自己統制と自律性に関する研究背景」では本論文の背景となる先行研究を論じている。そして、本研究では、自己統制を支える心理プロセスとして、「目標がある状況での目標と欲望の葛藤解決プロセス」だけでなく、人が主体的に行う活動をも含めて、自律性の欲求が自己統制を支える心理プロセスに及ぼす影響について検討している。</p> <p>第3章「自己統制と人の自律性に関する信念—自由意志信念と自発的な制御の観点から」では、人が持つ自律性への欲求が生み出す信念である自由意志信念が、自己統制にどのように関わるかを検討している。研究1では、自由意志信念を測定する尺度の日本語版を作成し、市民4000人を対象に調査して、信頼性・妥当性を検討した。研究2では、この尺度を用いた大学生59名による実験により、行為者が自ら行動の調整を行う際の心理プロセスにおいて、自由意志信念の強さは、自律神経系の活動を介して、意思決定方略の移行を促すことを、指尖容積脈波を用いた実験によって明らかにしている。</p> <p>第4章「自律的な自己統制への主観的評価」では、行為者による非自律的自己統制の評価について検討している。研究3では193名の就労者を対象としたインターネット調査から、動機づけの自律性が低い人は長期的利得に繋がる行動の非行為後悔を近い将来であまり感じないように予期する結果を得ている。研究4では、行動選択時における自律性欲求の充足が、行動選択後の回顧的な評価に及ぼす影響を市民1343名の調査に基づいて検討している。その結果、自律的でない行為選択をした場合には、目標にしたがった行動であっても、好ましくないように評価されることを示している。</p> <p>第5章「自律的な自己統制の心理的帰結—制御資源モデルの観点から」では、非自律的な自己統制に取り組むことによる心理的帰結について制御資源モデルで仮定される自我枯渇現象の観点から検討している。研究5では、大学生70名に対して実験を行い、自我枯渇現象は、動機づけだけでは完全には補完されないことを示している。研究6では就労者424名を対象にして2時点でのパネル調査を行い、仕事への動機づけが非自律的な就労者において感情制御の頻度とバーンアウト傾向の変化に正の関連が見られ、バーンアウト傾向の増加に繋がる可能性を示している。</p>			

第6章「自律的な自己統制の獲得」では、動機づけの変化によって、自己統制に伴って生じる自我枯渇の程度が軽減されるメカニズムについて検討している。研究7では、46名の大学生に対して実験を行い、報酬を用いた反応の慣習化が自我枯渇を軽減することを示している。研究8では、高校生253名に縦断調査を行い、試験直後の勉強しなかったことへの後悔が学業への自律的動機づけの獲得を促進するという結果を得ている。

第7章「総合的考察」では、第6章までの実証的検討を踏まえ新たな自己統制の概念モデルを提案している。ここでは、個人の目標に客観的事実と主観的体験の2つの理想状態があり、2つの目標達成にむけて自身の欲望と目標の認知に対処しようと制御することを説明している。そして、本論文の成果の学問的、社会的意義について論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、自己統制概念を自律性に基づいて再検討するために、その心理プロセスを解明する 7 つの研究を行った。そして、これまで未解明であった自己統制における自律性の影響を実証的に明らかにし、新たな自己統制のモデルを提起している。

本論文の特色は以下の 3 点である。

1. 自己統制概念における自律性に着目して、先行研究の知見と多角的な実証データを踏まえて、概念の拡大と精緻化による再検討を行い、新たなモデルの提起によって、動機づけをはじめとする広範な研究領域に理論的インパクトをもつ点
2. 大規模な質問紙法による個人差や時系列変化を測定する方法と、生理指標も含む心理学実験によって心理プロセスを解明する方法で、データを収集し、多変量解析を用いて分析した点で方法論上の新しさを持つ点
3. 就労者のバーンアウト、高校生の学業達成などに関する実証データに基づいて、自律的な動機づけの重要性を指摘し、さらに、問題行動抑制などに関する社会的な問題解決への示唆をもつ点

第 1 章では、自己統制と、関連概念である自己制御、認知制御の定義と、概念間の関係について検討し、先行研究では、自己統制の主体的な側面が見過ごされてきたことを論じ、「自ら選択し、行動を制御している感覚」である自律性の重要性を主張したところに本研究の着眼点の鋭さがある。

第 2 章では、自己統制において自律性が重視されるようになった背景の議論を整理し、「目標がある状況での目標と欲望の葛藤解決プロセス」だけでなく、人が主体的に行う活動をも含めて、自律性の欲求が自己統制を支える心理プロセスに及ぼす影響を解明することの重要性を指摘し、本研究の課題を明確化している。これは、自己統制研究における理論的貢献である。

第 3 章の研究 1 では、日本版自由意志決定論信念尺度を作成するために、4000 人を対象に調査して、その信頼性・妥当性を検討している。この尺度開発は、この分野における貴重な成果である。さらに、研究 2 では、この尺度を用いて自由意志信念の強さを測定し、指尖容積脈波を用いて測定した自律神経系の活動を介して、意思決定方略の移行を促すことを実験的に示している。これは、自発的制御を働かせる必要がある状況での生理反応・行動変化と自由意志信念の関連を解明した点で大きな意義をもつ。

第 4 章では、自己統制葛藤状況における自律的自己統制の予期的評価(研究 3)と自律的な行動選択の回顧的評価(研究 4)に関して、後悔の 2 側面に着目して調査研究をおこなっている。そして、自律的でない自己統制が長期的な後悔予期に影響し、回顧的後悔を高めることを見いだすなど、自己統制研究のみならず後悔研究の上でも重要な成果である。

第 5 章では、自律的でない自己統制に取り組むことが自我枯渇を引き起こし、ネガティブな影響を生み出すことを、自我枯渇を引き起こす精緻な実験(研究 5)と就労者のバーンアウトについての 2 時点パネル調査(研究 6)という異なるア

アプローチで解明している点が特徴的である。この結果は、仕事における疲労やバーンアウト傾向が起こる原因としての非自律的自己統制を見いだした点は、就労者への支援という応用的意義も大きい。

第6章の研究7では、動機づけの変化によって、自己統制に伴って生じる自我枯渇の程度が軽減されるメカニズムを、慣習化によって自我枯渇が低減されることを実験的に示している。研究8では、高校生の縦断調査によって、試験直後の勉強しなかったことへの後悔が動機づけの内在化によって、学業への自律的な動機づけの獲得を促進するという結果を得ている。これらの結果は、動機づけ研究への理論的な貢献に加えて、日常生活や学習場面での実践においても重要な示唆をもつ。

第7章では、8つの研究のデータを踏まえて全体を考察し、自己統制における目標は、客観的目標（学業達成など）と主観的目標（自律性の充足）に分かれること、これらの目標達成に向けた動機づけと欲望の葛藤の解消メカニズムが自己統制の中核にあることを指摘し、行動による結果を客観的事実と主観的評価（後悔など）に分け、フィードバックメカニズムを仮定して、体験と客観的事実を統合し、自律的な動機づけの獲得を説明する自己統制の概念モデルを提案していることは高く評価できる。さらに、このモデルによる社会化の説明への適用や問題行動抑制への示唆は、この研究の発展可能性を示すものである。

以上のように本論文は、自己統制における自律性を解明するために、幅広い研究を踏まえた問題意識に基づき、測定ツールや実験手法を考案し、大規模調査および生理指標を含む実験データを積み重ねて、議論構築と統合的モデルを提起することによって、学術面と方法論面で多くの新たな成果をあげているが、今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (a) 自己統制概念に対する認知統制やメタ認知の対比、学習性無気力との関係、自我枯渇と認知リソースとの関係、報酬による動機づけと自律性の関係、より広範な社会問題、実験室内の行動の検討
- (b) 自由意志信念の形成過程、モニタリングへの影響過程、近視眼的・遠視眼的マインドセットの影響過程、主体的経験のフィードバック過程、身体疲労から自我枯渇への逆影響過程などの解明
- (c) 一部データのより大きなサンプルでの検討、自我枯渇による低減と動機づけによる補完の相殺効果のチェックなどの検討

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって本研究は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成27年2月6日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降